

## 田中尚子著『三国志享受史論考』

黒田 彰

田中尚子氏の労作、『三国志享受史論考』（汲古書院、平成19年1月）が公刊されたことを、心から慶びたい。書名からは想像しにくいですが、本書は何よりも、国文学における専門的研究書である。そして、田中氏の研究方法は、一方に中世文学における軍記物語を見据えた、比較文学的方法であると言つて良いし、比較の主軸に置かれたのが、三国志であると捉えることが出来る（より正確には、本書前半（第一部）の主軸が三国志で、後半（第二部）のそれは、三国志を小説化した三国志演義）。さて、二十世紀の学問的パラダイムとしての国文学が行き詰まって久しく、その存立基盤が問い直されつつある今日、外ならぬ東アジア文化の一流として、日本文学の根幹を照射する本書の諸節は、二十一世紀におけるそのあり方を示す一つの解答として、例えば研究史上の金字塔たる、増田欣氏『太平記の比較文学的研究』（角川書店、昭和51年）以来、格段の深化を遂げた比較文学的方法による、大きな成果の一つと評することが出来る。

そのような田中氏による成果の数々は、後述の如く見るべきものが甚だ多いが、それを可能とした、氏の視点の広さの源は、「あとがき」における、次の言に窺い得よう。

もともとはドイツ語を学ぶつもりで大学に進学したはずだった。しかし、その気持ちは、時間割の都合上たまたま選択した日下力先生の『平家物語』の講義によっていとも簡単に変わり、先生のもとで軍記を学びたいと思うようになった。学部二年の時のことである。しかし、当時人文専修に所属していた身としては、そこで学んでいたことも生かしたかった。いや、本音のところでは、そのまま日本文学に取り組んでも日本文学専修の人たちにはかなわない、というこれまた変な負けず嫌い精神が働いたとする方が正しいかもしれない。ともかくも、ちょうどその頃、人文専修の演習では比較民族学のようなことをやっていた、その「比較」という手法に何かびんとくるものがあった。軍記と比較できるものは……となった時、ごく自然に三国志へと目が向いたのである。

例えば「人文専修」の語が「日本文学専修」の語を相対化していることを、興味深く思うのだが、ともあれ、氏の広い視野が本書の長所（また、短所）を形作っていることは、間違いないまい。今、氏による『三国志享受史論考』の内容を、目次によって示せば、次の通りである（私に①―⑳の通し番号を付す）。

## 第一部 日本における三国志の享受

## ①序章

第一章 軍記の三国志享受―故事・格言から説話への拡充―

②はじめに―『太平記』までの流れ―

③第一節 『太平記』における三国志の享受

④第二節 『太平記』中の三国志説話の利用―他作品に見える

三国志享受―

⑤第三節 『応永記』における三国志の享受

第二章 注釈世界における三国志―漢詩と儒学的興味による

享受―

⑥はじめに―和歌における三国志―

⑦第一節 清原宣賢と三国志―『蒙求聴塵』を中心として―

⑧第二節 関羽顕聖譚の受容―『碧山日録』を端緒として―

⑨第三節 五山・宣賢・軍記との関わり―注釈世界の一様相―

第三章 近世期における三国志―史書的興味、そして物語的

興味へ―

⑩はじめに―史書『三国志』への関心の高まり―

⑪第一節 林鶯峰と三国志―『国史館日録』を中心として―

⑫第二節 『通俗三国志』の成立

⑬第三節 『通俗三国志』試論―軍記の表現の援用とその指向

性―

⑭終章

第二部 軍記と『三国志演義』の比較

⑮序章

第一章 『太平記』以前の軍記と『三国志演義』

⑯第一節 『平家物語』と『三国志演義』における人物描写

⑰第二節 『保元物語』・『平治物語』と『三国志演義』

第二章 『太平記』と『三国志演義』

⑱第一節 『太平記』と『三国志演義』における智将の形象―

楠正成と諸葛孔明を中心に―

⑲第二節 『太平記』と『三国志演義』における死の叙述法―

人物描写との関わりから―

⑳付 張飛の描写に見る対比研究と享受研究の接点

終章

以下、ごく簡単に本書の内容を紹介しよう(通し番号に拠る)。

本書は、大きく二部から成り、第一部は、太平記前後の三国志享受を論じ(その三国志とは、「広く三国志言説一般を示す」もので、「三国志演義」は含まない)(①)とされる)、第二部は、三国志演義と軍記とを「対比研究」的に論じている(⑬)。まず第一部第一章は、「軍記の三国志享受」と題され、その②は、太平記以前の三国志享受を扱い、和漢朗詠集の五例、世俗諺文の三例を上げて、「合戦面への言及」のないことを、「享受の初期段階の実態」として指摘したものである(日本書紀は「例外」とされる)。③は、太平記の享受を扱い、「政道、良臣への意識が強い」特徴を指摘している。④は、流布本平治物語、楊鳴暁筆、壺囊鈔における、太平記を介した享受、⑤は、応永記の三国志享受を扱って、さらに十八史略、八陣図、伝国璽へと視界の枠を広げたものである。続く第二章は、「注釈世界における三国志」と題され、「月きよみ」歌の問題を緒論として(⑥)、宣賢の蒙求聴塵(⑦)、碧山日録(⑧)、中華若木詩抄と十八史略、宣賢と月舟寿桂の関連や、軍記の典拠化する現象(⑨)などが扱われる。第三章⑩―⑭は、専ら通俗三国志に焦点を当てた諸編である。⑩は清原家と林家、⑪は林鶯峰の三

国志加点和刻本の刊行をめぐる、言わば「『通俗三国志』成立前夜」を扱い、さらに⑫で通俗三国志の成立論、⑬でその軍記の表現援用の問題が論じられる。⑭は、成立以後を補説したものである。

第二部は、出典研究から離れた「対比研究という手法」による、「人物継承・人物描写の問題に絞った考察」(⑮)を内容とする点、第一部とは聊か趣きを異にする。氏が、

出版に際しては、対比研究を行った第二部をカットしてしまつた方がすっきりしてわかりやすいのではないかと、悩みもした(あとがき)

と洩らされていることは、典拠論を主たる方法とする第一部と、対比研究を方法とする第二部との間に見られる、二つの研究方法をめくって、それらの氏の捉え方に、小さからぬ揺れが存することを示すものである。まず第二章一章は、「『太平記』以前軍記と『三国志演義』」と題され、⑯は、平家物語と三国志演義(以下、演義と略称する)における人物描写、合戦描写を対比的に扱う。⑰は、保元、平治物語(金刀比羅本を中心とする諸本)と演義(毛宗崗本及び、嘉靖本、三国志平話、三分事略、花関索伝)における装束描写の色彩、容貌描写を扱い、結論として「自由に改変する余地がある」軍記、「取替不可能な」演義という、彼我の文学史上の質的な相違を導いている。演義諸本の挿絵に着目した、⑰末尾の「図像に見る三国志」は、殊に興味深いものである。続く第二章は、「『太平記』と『三国志演義』」と題され、⑱―⑳の三編を通して、太平記と演義との対比的研究が試みられる。⑱は、楠正成と諸葛

孔明を取り上げ、その人物設定の共通性、合戦描写の類似性また、知謀、智将としての異質性を論じる。⑲は、太平記と演義における「死の描写」、特に討死、一騎討ち、自害といった場面の相違を問題とする。⑳は付節であるが、演義と我が国の通俗三国志における、張飛の描写が対比され、その相違に軍記、特に太平記の樊噲の叙述の影響を指摘して、「本書第一部と第二部の考察結果が有機的に結び付く……証明」たらしめようとしている。

以上のような内容をもつ本書は、体系的に一貫して、我が国における三国志享受の文学史を構成し得ている点、始めに述べた通り、比較文学的方法による、画期的な成果と評し得よう。特に第一部第二章(⑥―⑨)など、旧来の文学観では視野に入りにくい「注釈世界」に切り込んで、将来的な課題が少なからず示唆されることや、同第三章(⑩―⑭)が、通俗三国志を具体的な文学史の問題として闡明したことは、高く評価することが出来る(但し、⑭を日本古典文学大辞典の引用に負わせたのは、聊か安易に過ぎよう)。

以下、私の所感一、二を述べて、書評の結びとしたい。まず②は、平安時代の三国志享受一般を扱ったものとしては、余りにも筆が粗い。例えば寛治二(一〇八八)年序、長承二、三(一一三三、四)年写、大谷大学蔵三教指帰注集(成安注)に散見する魏志、呉志、蜀志なども気になるが、また、世俗諺文の「有智無智隔卅里。世説云……」の上げ方は、世説新語四捷悟十一と蒙求219「楊脩捷対」注を指摘するのみに留まっ(八字の迷文の説明さえなされていない)、これだけでは読者には何のことか分かるまい。さて、当話は曹娥の碑をめぐる話なのであって(太平記三十四に、

「曹娥精衛事」がある）、世説以前古く晋、裴啓の語林に記されたものが盛行したが、それが散逸したため、魯迅の『古小説鈞沈』が学林、草堂詩箋、類林雜説、瑠玉集の四本に拠り、苦心の末それを復元した経緯その他は、坂田新氏「曹娥の碑（上）」（愛知県立大学文学部論集〈国文学科編〉29、昭和55年3月）に詳しい。そして、前述三教指帰成安注上本には、注目すべき語林の逸文が載っている。また、ごく最近鎌倉時代写、金剛寺藏明句肝要の裏表紙見返に抜書された、その逸文らしきものを目撃した（後藤昭雄氏他「金剛寺藏『明句肝要』——解題と影印・翻刻」（『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』、平成16—18年度科学研究費補助金研究成果報告書第1分冊、平成19年3月）。当話を上げるに際しては、曹娥碑また、曹娥譚に触れるべきであり、なお世俗諺文末尾の割注「私云、釈籤第九、卅五里云々」の説明も必要であろう。

次に、④において氏は、古活字本平治物語中「六波羅合戦の事」に見える、「死せる孔明、いける仲達をはしらかす」という諺を、「源となつたのは、『太平記』だったのではないか」「『太平記』を参考にしたが故の増補だったのではないだろうか」と結論するが、周知の如く、昭和二十七年から三十年に掛けての釜田喜三郎、高橋貞一氏による一連の論攷において、流布本保元、平治物語の壘囊鈔引用が明らかにされており、壘囊鈔四にも、「死セル孔明、生ル仲達ヲ走ス」の諺が載る（④の55頁）。すると、この諺も壘囊鈔から来ている可能性はないのであろうか。また、榻嶋曉筆三「諸葛孔明付仲達」における——部②について（49頁）、氏は、その出典を三国伝記十二・十四であろうと考証している。ところで、そ

の三国伝記の典拠が、胡曾詩抄29「南陽」、130「瀘水」、131「五丈原」注であることを、かつて指摘したことがある（拙著『中世説話の文学史的環境』（和泉書院、昭和62年）I—1）。だから、ここは榻嶋曉筆、三国伝記、胡曾詩抄の先へと考証を及ぼさなければ、氏の言う三国志享受の実際の形は、明らかにならないように思われる。

最後に、⑤における国会本応永記の増補部分Eの——部、大國ノ秦ノ李斯ガ藍田ノ玉ニテ造シ印璽玉ニハ替リテ（60頁）の考証として、氏は、元亨釈書十七の、

故始皇刻三下璧、以為三國璽、漢又以高祖斬白蛇劍、為伝國宝、爾來劍璽為三、國器

を引き、「おそらくはこのようなものに『応永記』は拠っていたのであろう」と結論するが、一見して分かるように、上記の両者は全く対応せず、その行論には甚だ無理がある。両者は、別の伝承と見た方がよい。そして、ここでもし典拠を上げるとすれば、例えば後漢書一上、光武帝紀の「赤眉君臣面縛、奉高皇璽綬」に對する章懷太子注に引く、

玉璽譜曰、伝國璽是秦始皇初定天下、所刻、其玉出藍田山、丞相李斯所書、其文曰、受命于天、既寿永昌

を上げるべきであろう（太平御覽六八二また、明文抄一などにも）。

ところで、以上は、私の所感一、二を述べたに過ぎず、敢えて毛を吹いて疵を求めたまでではない。無論、それらはいずれも本書の価値を聊かも減じるものではない。田中氏は私より二世代も若い、気鋭の研究者に外ならない。故に、例えば典拠論と對

比研究という、言わば逆ベクトルをもつ二つの方法が、時として互いに相殺し合って、双方にマイナスの効果を及ぼすことのないよう、氏の方法論をなお確実なものとされること、及び、本書に

続く、氏による第二、第三の成果の豊かな結実を、私は心から願うのである。  
(二〇〇七年一月 汲古書院 A5判 三六二頁 税込九九七五円)

## 新刊紹介

小林保治・李 銘敬著

### 『日本仏教説話集の源流』

(研究篇・資料篇)

日本の仏教説話文学は、多くの中国仏教説話集や類書の影響を受けて成立している。本書は、こうした日中説話文学の受容のあり方に注目し、説話集レベルでの相関関係に着目した李銘敬氏の博士論文をまとめたものである。本書は、尊経閣文庫所蔵本『三宝感応要略録』の翻刻及び訓読が収録されている資料篇と、研究篇の二冊組である。研究篇においては、日中の説話文学の中でも重要な位置を占める、『冥報記』、『三宝感応要略録』、『日本霊異記』、『今昔物語集』を比較考察対象として選定し、説話の素材、撰者の修養、作品生成の時代思

想及び作品間の交渉など、全面的な受容の諸相に目を配っている。また、これまでは出典資料として間接的にしか取り扱われてこなかった漢籍自体に詳細な検討を加え、日本の仏教説話集と対等の俎上に載せた意義は大きいといえる。

(二〇〇七年二月 勉誠出版 B5判 研究篇三二六頁 資料篇四〇一頁 税込四二〇〇〇円) (高津希和子)

小林保治・藤本徳明著

### 『中世説話の人間学』

「古典文学離れ」が指摘されて久しい現高等学校の古典学習では、文法学習に重点が置かれ、もはや「古典」が第二外国語視され、ますますその傾向が強くなってきている。本書はこのような問題を打破すべく、全体を大きく二五のテーマに分け、

テーマごとに数々の楽しい説話(主に民間説話)を挙げている。その中に人間の持つ執念、煩惱、闘争心、自己中心性といった精神面での愚かさや、他者といかに関わり合いながら生きていくか等、説話を通して中世を舞台とした人々の人生における多様な悲喜劇が色とりどりに散りばめられて、とても興味深い。読者はここに採られた説話からだけでも、今の我々と奥深いところで通底するものがあると感ぜられずにはいられないだろう。

世界は流動し、「今」もなお、絶えず変化している。本書は、現代人に示唆を与える点が多く、筆者の言うところの、若者のみならず団塊世代の「古典文学回帰」に対して非常に有益なものであり、また、説話の醍醐味が凝縮された一冊である。  
(二〇〇七年五月 勉誠出版 A5判 二六二頁 税込一九九五円) (柳本真澄)